

ア ジ ア 太 平 洋 の 人 を つ な ぎ 学 び を 育 て る

ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

news

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集

人が紡ぐ教育のチカラ
人物交流事業……………2

パキスタンの若者プロジェクト……………7

サステイナブルスクール研修……………8

SDGs子どもワークショップ……………8

「ESD推進の手引」研修(長野県)……………9

全日本高校模擬国連大会報告……………9

ユネスコスクール活動報告……………10

コラム「東奔西走」……………10

活動メモ……………11



No. 404

2018年2月号

以前から日本との交流経験がありながらも、歴史上の問題などによって心の中にわだかまりがありました。今回の訪問を通じて、交流を深めたい気持ちが強まりました。また、ほとんどの通訳さんは日本人でしたが、中国語のレベルが非常に高く、両国の友情を大事に思っているからこそ、中国語が上達したのだと感じました。

(中国教職員・11月来日)

学校訪問を通して、ESD*の重要性を実感しました。生徒たちに地域の文化、伝統について普及し、それらを保護するプロジェクトを立ち上げようと考えています。

(インド教職員・11月来日)

素敵な出会いがたくさんありました



2017年度を振り返って

2017年度は、国際教育交流事業として5月に中国、7月に韓国に日本の先生を派遣したほか、秋以降は海外の教職員招へいプログラムとして10月にタイ、11月にインドおよび中国、1月に韓国の教職員を招へいしました。

また、8月には2度目となる「日タイ高校生科学技術交流プログラム」*を実施し、タイの高校生を日本に招へいしました。

韓国での日本文化紹介授業をきっかけに、高校の理科教員である自分が人前でダンスを踊り、通訳を介さずに韓国語で授業を実施するまでに成長できました。人は努力すれば短期間でも急成長できることを証明した文化紹介授業の影響は計り知れないものがあります。次回このプログラムに参加される先生には、ぜひ授業の担当をすることをお勧めします。

(日本教職員・7月訪韓)

このプログラムで教育制度、授業法、日本の文化など様々な経験や知識を得ることができ、非常に良いプログラムでした。日本人の先生は、より良い授業のためにどのように改善すべきか常に研究し、児童・生徒がより積極的に授業に参加できるよう様々な教材を利用していることがわかりました。

(タイ教職員・10月来日)



人が紡ぐ 教育のチカラ

特集
人物交流
事業

Message from UNU 友好は平和の第一歩

国際連合大学
IAS大学院プログラム事務局長
古田 知美氏

国際連合大学(以下UNU)の使命は、国連とその加盟国が関心を寄せる緊急性の高い地球規模課題の解決に取り組むため、共同研究や教育を通じて寄与することです。あらゆる課題を解決する根本といえる教育分野で、グッド・プラクティスを学びあうことや互いの国のよさを児童・生徒に伝えることは、非常に重要だと考えています。それは次世代の平和を構築していくことにつながり、国連の目標に重なるからです。

私は2016年から当事業を担当しており、プログラムに随行して、交流が生まれる現場に立ち会ってきました。どの国の先生も一意専心の思いで教育に取り組まれている、いろいろな局面でさらに意識が変わってくるのを目の当たりにしました。

受け入れる側も訪問が決まった段階から、先生と児童・生徒が一緒に、相手国について深く学び国際教育交流に貢献されています。模造紙に調べ学習をまとめたり、歌を歌ったり、国旗を作ったり挨拶を覚えたりすることで、相手国への興味をかき立て、温かく迎える素地が作られるのだと思います。メディアを通じた情報だけでなく、直接交流することが大切です。異文化への理解、そしてSDGs*も、人と人との交流によって広がり、友好が深まっていくのです。



2016年の韓国派遣プログラムで歌を披露(前列中央)

Message from UNU 継続的に、日常的に

沖縄科学技術大学院大学准副学長
岩佐 敬昭氏
(元国際連合大学IAS大学院
プログラム事務局長)

国際教育交流事業を通して、臆することなく海外で活躍できる人材が生まれること、また、学校のあり方を考えるきっかけになることを期待しています。例えば、日本人にとっての中国が物理的にも心理的にも遠くなっているように感じます。その点、中国の教員や児童生徒と継続的に交流を行っている学校は、先入観なく等身大の中国を見る目が養われていると思います。

私の職場環境は、大部分が日本人以外です。既に、半数以上が外国人という小学校も国内に出現しています。個人として、外国人とも対等に当たりあいながら生きていくことは、難しい場面も多いですが、楽しいこともあります。私自身のために必要な語学力を磨き

ながら、より重要な専門的な知識や経験、へこたれない粘り強さを身に付けていきたいと思っています。「日中友好」や「日韓友好」などのフレーズは、次の2つの理由から実はあまり好きではありません。①思考停止を招く——よくある風景ですが、「日中友好」のために頑張りましょう!—と言うとそれだけで何か有意義なことをしている気分になっていませんか? ②「友好」が必要ないことが理想的——本当に仲の良い友人と日常的に友情を確認しますか? 大上段に構えなくても、日常の中で、日本人であろうと外国人であろうと対等に接するうちに親しい友人や同僚になり、結果的に「日中友好」に結び付けばいいと思います。



2014年の中国教職員招へいプログラムにて訪問団長と(右)

* 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 支援のもと、日本・アジア青少年サイエンス交流事業 (さくらサイエンスプラン) の一環として実施。
* ESD: Education for Sustainable Development (持続可能な開発のための教育)

* Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標

中国

2017年度
受入れ校

横浜市立日限山中学校

菱刈 範之校長

意識したことは、飾らない日常の学校を見ていただくこと、そして生徒の活動の様子、教師のお客

様への対応等に、外部の方（今回は中国の教師の方々）がどのような印象や感想を持ち話されるのかを、本校の教師がしっかりと受け止めることです。その一つ一つが学校にとっての改善の指標になり、教師にとつての異文化理解と自己啓発に繋がります。教師はいつまでも



菱刈校長(左)と訪問団の沙清先生(右)

好奇心を持ち続けていなければなりません。その根底にあるのは、自分自身が未熟であることを意識し、常に向上しようとする姿勢です。何も知らないし何も分かっていないことに気づいていなければ、生徒が理解できるように教えることはできません。中国で選ばれた先生方が本校を訪ねてくるのなら、いくらでも吸収するものがあるはずと考え、訪問の受入れに手をあげました。

本年度は、横浜市教育委員会の受入れのもと、横浜市内の小中学校を訪問しました。地域によっては外国にルーツを持つ子どもたちが多くいる多文化が共存する港町です。中国の子どもたちと仲良くしたい、そのためにどうしたらよいか、子どもたち自身も考える教育現場を見ることで、中国の先生たちも日本に対して心を開くことができたプログラムとなりました。



ACCU

韓国

2015年度
派遣プログラム
参加者

東京都立石神井特別支援学校

町田 直美先生

「未知の文字をもつ言語を学ぶことで、学習障害をもつ子どもの気持ちを理解したい」という思いで韓国語を学びはじめ、交流の手がかりになるつながりを作るべく、韓国への派遣プログラムに参加しました。その後、招へいプログラムで来日する韓国の先生方との交流会などを通して親交を深め、毎年韓国を訪問し、現地の学校で共同授業を行うなどの活動を行っています。当初は、韓国で何度も授業を行うことになるとは予想もしていませんでしたが、韓国で知り合った先生方とのご縁や草の根交流を



済州島の小学校での日本文化紹介授業

続けることの大切さを実感し、交流を続けていきます。私自身は韓国語学習者ですが、「特別支援教育の考えを持って臨めば、ことばが通じなくても伝わる」ということを日本の先生に伝えたいです。ことばが通じないことを理由に交流しないのは勿体ない、「始めが半分*」「千里の道も一歩から」です。簡単なことでも構いません。まずは行動して、少しずつでも続けることが、大切です。

交流の現場から

インド

2017年度
受入れ機関

伊豆半島ジオパーク推進協議会

松永 一隆氏

伊豆半島ジオパークは、ユネスコ世界ジオパークへの加盟を見据えており、他地域や国際連携の必要性を感じていた時期でしたので、インド教職員の訪問をよい機会と思つて受入れました。これを機会に、ESDの観点でも国際連携を進めていけたらと考えています。

浄蓮の滝・山葵沢・達磨山の3つのジオサイトを見学していただきましたが、ただきれいな景色や地質遺産を楽しむだけでなく、ストーリー性を持つジオ(大地)



浄蓮の滝で説明を聞きながら見学をする訪問団

と地域のかかわり方を案内できる場所を選定しました。また、せっかく伊豆半島ジオパークを訪れていただくので、日本らしさだけではなく伊豆半島だからこそ見たり体験したりできるジオサイトを選定しました。インド教職員の訪問時には、2紙の取材があり、ジオパークの活動紹介として一定の成果が得られたと思います。

「新幹線に乗って、学校訪問と文化体験を」という思いから、1週間のプログラムの中1泊2日で静岡県を訪問しました(1日目は静岡市、2日目は伊豆市)。ジオパーク訪問は事前に決まっていたので、訪問団には地学や環境の先生が多く含まれ、ジオサイトと学校訪問を通して地域を知るといふ実りあるプログラムになりました。



ACCU

タイ

2016年度
交流会参加者

大田区立大森第六中学校

町田 恵理子先生

2016年のタイ教職員招へいプログラムの中で行われた交流会で同じグループになったタイと日本の教職員でSNSのグループを作成し、そこで各学校の教育活動の様子を共有してきました。その中で、タイのジラサートスクールのが、小学校4年生から高校2年生の代表児童・生徒34名と引率の教職員の方々で来日する際に、是非本校を訪問して文化交流をしたいという打診を頂き、10月17日(火)半日の交流プログラムを企画しました。本校は群読と、歌詞も曲



タイの生徒からの挨拶

も本校で作成した「平和の歌」を披露し、ジラサートスクールのみなさんからは、学校紹介のプレゼンテーションと伝統舞踊の披露がありました。言語は違っても互いに身振り手振りで何とかコミュニケーションを取ろうとする姿勢がみられ、大変嬉しかったです。互いの国に興味を持ち、持続可能な社会の担い手として将来いつかまた「つながって」くれる機会になればと期待しています。

韓国とのプログラムでは、毎回「文化紹介授業」を何名かの先生方に担当していただきます。2018年1月のプログラムでは、大阪ユニネスコスクール(ASPEP) ネットワーク・池田町教育委員会(岐阜県・愛知県教育委員会)の受入れにより、約100名の教職員が来日しました。



ACCU

※2017年12月、ACCUにてインタビュー

2017年度は、岡山県吉備中央町教育委員会の受入れのもと、タイの教職員等15名を招へいしました。参加者からは、同町の田園風景がタイの東北地方に似ている親近感があるとの声があり、異なる教育や文化があっても、親しみをもち各訪問機関と交流できたプログラムとなりました。今後の交流の発展にも期待しています。



ACCU

*韓国のことわざで、「物事を始めようと考えたとき、それを行動に移した時点で目標の半分は達成している」という意味。



アザムさん

ACCU Programme

成長し続けるパキスタンの若者

若者が主体性をもって自分の村の課題解決に乗り出してみよう。そんな思いで、手探りで始まった当プロジェクトも4年目となりました。段階を踏み、着実に自信をつけて行動する頼もしい若者たちの姿をお届けします。

4年目を迎え 熱烈な歓迎を受けて

プロジェクト開始から4年目を迎える今年9月、ACCUはパキスタンのナンカナサヒーブ州を再び訪れました。パキスタン西部の玄関口であるラホール市街から車に揺られること2時間半、乾いた地面から土埃の舞う活気溢れる州都に到着。現地のパートナー団体であるサンジプリートから活動に

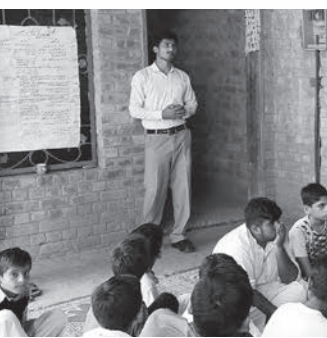
自主的に意欲的に 村のために立ち上がる

ドニ村タイガーグループのリーダー、25歳のアザムさんは村で仕

ついて報告を受けた後、さらに車で30分、コタクレー村に到着しました。外国からの客人を迎えることは、村にとって一年で最大のイベントです。バラの花びらと手作りの民芸品が彩る集會場で、お祈りと踊りによるパキスタンらしい熱い歓迎を受けました。翌日も同じく農村まで足を運び、3つの村の計6つの若者グループから話を聞きました。活動4年目に入った若者たちの声をご紹介します。

教育協力部 若山洋子

立屋を営んでいます。生後6ヶ月でポリオを患い、幼い頃から三輪の車椅子で生活を送り、中学校へは毎日7kmの道のりを片道40分かけて通いました。イスラムの教えに従い慈善事業への志を常に持っていたアザムさんは、プロジェクトについて知ったときすぐに参加を決定したそうです。「これまで活動してきて一番嬉しかったことは、家庭の事情で働かざるを得なかった子どもたちが若者グループによる啓発活動で学校に通えるようになったこと。そして、グループが提供するマイクロファイナンス制度を利用して、自分よりも重い障害を抱えた人が事業を始めることが出来たことです。僕らの活動で誰かを幸せに出来るのだと思



活動報告をするアザムさん

えることがとても嬉しいです」そう語ってくれました。同じくタイガーグループを支えるのは17歳のアザムさんです。活動を始めたときはまだわずか14歳でした。「この話を耳にしたとき、若い自分たちが声を上げなくて一体誰が村のために活動するのだと思いました」とアザムさん。多くの男性は勉強を終えると村の外へ出てしまいます。学生の今ならばそのエネルギーと時間を村のために捧げることが出来ると考え、グループとしての活動のみならず全体の事務仕事をも担っています。ACCUでは来年に向けて、自らが主体となって地域の開発に取り組んできた若者と彼らの村の変容の物語を収めたストーリーブックを作成中です。彼らがどのような手法と姿勢で課題に取り組み、村の持続可能な開発のために活動してきたのかを深掘りしていきます。どうぞご期待ください！

タイ

高校生同士の交流、その魅力とは？

2017年の2月・8月と2回にわたり、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）支援のもと、日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）の一環として「日タイ高校生科学技術交流プログラム」を実施しました。教職員を対象にしたプログラムとは一味違う、高校生の交流プログラムです。日本の優れた科学技術を紹介することはもちろん、日本の高校生との交流、ネットワーク作りも本プログラムの目玉の一つです。2月には、「身の回りの『困った』をテクノロジーで解決しよう」をはじめとした様々なディスカッション活動を通して、両国の高校生が友好を深めました。また、8月には、両国の高校生が一緒に筑波宇宙センター、サイエンススクエアつくばを見学しました。それぞれの国の歌や踊りを披露する機会のある歓迎夕食会も、笑顔のあふれる楽しい時間になります。「国や文化は違っても、同じ目標を持つ同世代と出会えてうれしい」と夢を語り合う両国の高校生の姿、「内向きな自分を変えたい」と思っていたが、タイの高校生



交流会での両国の高校生による合同発表



盆踊りを一緒に楽しむ日本・タイ両国の高校生（歓迎夕食会）

との交流を通して自分が変わったことを実感した」と日本の高校生からの感想、「いつか研究者として日本に戻ってきて、日本の友だちと再会したい」というタイの高校生からの希望溢れることばなど、両国の高校生が科学技術を通して友好を深める中でたくさん感動がありました。

2017年度 国際教育交流事業の総まとめ！ 報告会&ワークショップ開催

ACCUでは、2017年度に国際教育交流事業として実施したプログラムの報告とその後の展開をお伝えすると同時に、国際交流に関心を持つ先生同士の交流の場づくりを目的とした報告会とワークショップを行います。お問い合わせの上、ぜひお越しください！ 締切を過ぎても、参加ご希望の方はご連絡ください。

日時 2018年2月28日(水)
報告会・ワークショップ 15時30分～18時
懇親会 18時30分～20時
場所 日本出版会館
定員 50名(応募締切:2月15日)
応募方法 右のQRコードまたはURLから
<http://goo.gl/forms/qMx1PRBYeEr1pVes1>
お問い合わせ 人物交流部 高松
accu-exchange@accu.or.jp

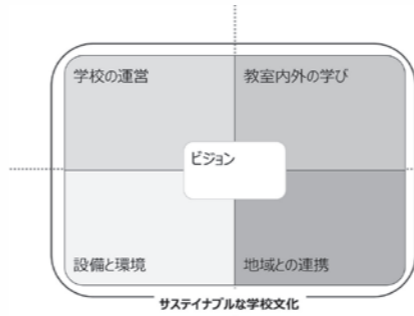


学校全体で、想いを一つに

教育協力部 藤本早恵子

ESDに学校全体で取り組み、地域や世界を巻き込んで持続可能な社会構築への寄与を目指すサステイナブルスクールは、事業開始から2年目を迎え、参加24校がより一層使命感を持って活動を展開しています。

昨年度は、2度の研修会を経て、お互いを知り、ESDや学校全体で取り組む「ホールスクールアプローチ」についての理解を深め、事業展開の基盤を整えました。今年度も引き続き7月と12月に研修会を行い、ESDの実践を深めると



ともに、学校全体で想いを一つにし、着実に取り組んでいくための方法を考えました。特に今年度は、ACCUがユネスコの示す指針や外部有識者の助言も取り入れ、学校のビジョンと活動を視覚化できるツール「ホールスクールアプローチ・デザインシート」(図参照)を開発し、参加校の賛同を得て活用していくことになりました。12月の研修会では、核となるビジョンについて掘り下げて考え、その重要性を再確認しました。今後各校のビジョンは、学校に関わるすべての人にとって、未来への共通の道標として根付いていくことでしょう。

サステイナブルスクールは、変革を求められる日本の教育現場において、またあらゆる課題に直面している現代社会の中で、とても大きな夢に向かってチャレンジしています。皆様、ぜひ応援してください！

持続可能な自分と地球

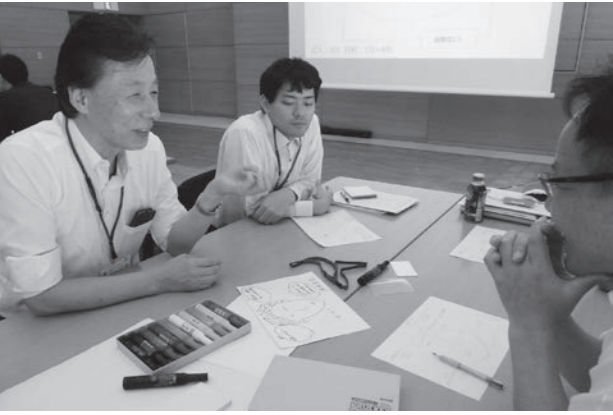
教育協力部 篠田真穂

2017年10月1日(日)、南アルプスの一望できる伊那市を会場として、「ESD推進の手引(初版)」を活用した研修会を実施しました。この地域一体は、大地の特徴を自然に感じたりして楽しむことのできる「南アルプスジオパーク」として認定を受けています。

研修会では、静岡大学の山本隆太先生、そして横浜市立永田台小学校の住田昌治校長をお招きし学

びの場を持ちました。地理教育を専門とされている山本先生からは、「人間は地球での生き方を知らないのではないか」という問いから、持続可能な「地球(ジオ)」を目指すための教育とは何かという視点でジオパークでの具体的な実践事例を交えながらお話いただきました。住田校長には、ホールスクー

ルアプローチと自己変容についてお話いただき、「まず自分が持続可能な状態であること、そして自分が言葉にしたことは自分の行動に重なること」というお言葉をいただきました。午後はACCUが「あなたの幸せ、みんなの幸せ」を軸にしたワークショップを開き、幸せに対する共通価値と持続可能性について考える時間を持ちました。ご参加いただいた皆さんにとって本研修会が、自分―地域社会―世界をひとつながりにするきっかけとなったのであれば嬉しいのです。



SDGs こともワークショップ 個と世界のつながりを体感

教育協力部 若山洋子

文化の日に、「SDGs こともワークショップ」を開催しました。当日は、小学校1年生から高校1年生までの児童生徒、保護者や教員を含む総勢49名が、「食」を中心に据えた二つのワークショップとポスターセッションを通じて、個人と世界との繋がりを共に体感し、貧困や格差、エネルギー問題などについて共に考えました。「世界がもし100人の村だったら」ではNPO法人コムンビート理事の

韓朱仙先生に講師としてご協力頂きました。ワークショップの最後には自分たちには何ができるのか、身近な取り組みから大きな目標まで、大人も子どももそれぞれにアイデアを出し合い、リンゴの木にたくさんの「アイデアの実」が実りました。



先進国が無駄遣いをしているのを改めて知った (子ども)

初めて生徒と一緒に学び、考えることが出来ました！本当に持続可能な社会の担い手を育ててゆくことの大切さと責任、そして楽しさを感じられた一日でした (教員)

子どもも大人も同じ気持ちになれるすばらしいワークショップでした (保護者)

今日学んだことを学校のみんなにたくさん伝えていきたい (子ども)

世界平和を考える

模擬国連推進部 青木文

第11回全日本高校模擬国連大会

11月に国連大学で行われた全日本高校模擬国連大会は、過去最多となる233チームが事前の書類選考に応募し、その中から選ばれた86チームが担当国大使になりきった2日間となりました。今年の議題は「ジェンダー平等」。これまでの「食料の安全保障」や「サイバー空間」といった議題設定とは異なり、思想や文化、宗教という背景も考慮した上で宣言をまとめることが求められ、例年に増してレベルの高い会議となりました。特に、LGBT(性的少数者)をどう捉えるか、またその国の信念の根底に何があるのか、参加者自身の考えではなく、担当国の立場を主張しなければならぬ点で高校生たちは悪戦苦闘していたようです。

自分と異なる立場を理解しようと努めるから解決を模索する参加者たちは、世界平和を追求する若者の集まりと言っても過言ではありません。最優秀チームに選ばれた海城高等学校(メキシコ大使)と桐蔭学園中等教育学校Bチーム(UAE大使)、優秀賞の受賞者*を含む計12名を、5月の国際大会に派遣します。ニューヨークを舞台に、ウругアイ大使として世界各国の高校生と国際問題の解決に取り組む派遣生たちにご期待ください。

自分と異なる立場を理解しようと努める

DATA

主催: ACCU、グローバル・クラスルーム日本委員会
 共催: 国際連合大学
 実施期間: 11月11日(土)~12日(日)
 開催場所: 国際連合大学 ウ・タント国際会議場、エリザベス・ローズ国際会議場
 参加者: 高校生172名、引率教員約90名(全70校86チーム)、見学者約250名



*優秀賞: 渋谷教育学園渋谷高等学校Bチーム(エチオピア大使)、鳥取県立鳥取西高等学校(ノルウェー大使)、頌栄女子学園Aチーム(ポーランド大使)、浅野高等学校(スロバキア大使)

ACCU 活動メモ 2017年9月~12月

①実施期間 ②主催、共催団体名 ③開催場所 ④参加国、参加者数

国際識字デーイベント

詳細…下の囲み記事

①9月8日(金) ②ACCU、シャンティ国際ボランティア会、日本ユネスコ協会連盟 ③上智大学四谷キャンパス ④43名

若者プロジェクトin パキスタン現地視察

詳細…P7

①9月10日(日)~15日(金) ②ACCU ③パキスタン ④3名(ACCU)

「ESD推進の手引」を活用した研修会—長野県—

詳細…P9

①10月1日(日) ②文部科学省、ACCU ③伊那市 ④26名

タイ教職員招へいプログラム

参考…特集

①10月15日(日)~22日(日) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、岡山県吉備中央町 ④15名

SDGs こどもワークショップ

詳細…P8

①11月3日(祝) ②ACCU ③横浜 ④参加者49名

医愛祭資料展示

医療保健大学「医愛祭」に展示し、来場者に識字教育について説明を行った。

①11月3日(祝)~4日(土) ②ACCU ③東京

医療保健大学世田谷キャンパス ④来場者420名

インド教職員招へいプログラム

参考…特集

①11月5日(日)~12日(日) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、静岡県 ④15名

全日本高校模擬国連大会

詳細…P9

①11月11日(土)~12日(日) ②グローバル・クラスルーム日本委員会、ACCU ③国際連合大学 ④参加高校生172名

ASP UnivNet研修会および第2回連絡会議

①11月11日(土) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館 ④約30名

中国教職員招へいプログラム

参考…特集

①11月14日(火)~21日(火) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、横浜市、京都府 ④29名

サステナブルスクール第2回研修会

詳細…P8

①12月2日(日) ②文部科学省、ACCU ③福岡 ④48名

「ESD推進の手引」を活用した研修会—大分県—

参考…P9

①12月8日(金) ②文部科学省、ACCU ③大分

④150名

「ESD推進の手引」を活用した研修会—愛知県—

参考…P9

①12月26日(火) ②文部科学省、ACCU ③愛知 ④48名

奈良 文化遺産の保護に関する研修(集団研修)

「木造建造物の保存と修復」をテーマに、奈良や京都で木造建造物を観察、保存方法を学ぶ長期研修。

①8月29日(火)~9月28日(木) ②共催:文化庁、ACCU奈良事務所、イクロム、国立文化財機構東京文化財研究所・奈良文化財研究所 ③ACCU奈良事務所ほか ④14か国から15名

奈良 文化遺産の保護に関する研修(個別テーマ研修)

「博物館等における文化財の記録と保存活用」をテーマに現場で文化遺産保護に係る担当者を招いて研修を実施。

①10月10日(火)~11月3日(金) ②共催:文化庁、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良文化財研究所、ACCU奈良事務所 ③京都国立博物館、ACCU奈良事務所ほか ④3か国(フィジー、パプアニューギニア、ソロモン諸島)から6名

奈良 文化遺産の保護に関する研修(文化遺産ワークショップ)

ネパールで実務担当者を対象に「文化財の写真記録とデータの管理活用」をテーマとして実施。

①11月15日(水)~20日(月) ②共催:文化庁、ACCU奈良事務所、ネパール政府文化観光民間航空省考古局 ③ネパール国立博物館、ハヌマンドカ王宮広場ほか ④ネパール政府機関に勤務する文化遺産保護担当者20名

奈良 世界遺産教室

奈良県内の高校生に、文化遺産保護の重要性を楽しく学んでもらう出前授業。

- ①10月3日(火) ③奈良県立法隆寺国際高校3年生 ④39名
- ①11月2日(木) ③奈良県立欽陵高校2年生 ④26名
- ①11月7日(火) ③奈良県立橿原高校2年生 ④319名
- ①11月22日(水) ③奈良県立登美ヶ丘高校1年生 ④240名
- ①11月27日(月) ③奈良県高田高校1年生 ④80名
- ①12月5日(火) ③奈良県立五條高校1年生 ④40名
- ①12月12日(火) ③奈良県教育研究所社会科担当教諭 ④20名程度

未来へつなげ! ユネスコスクール Good Practice ①

フィールドはふるさとの海

気仙沼市立唐桑小学校



本校では、海をフィールドとした体験学習と多様な交流を通して、豊かな心を持ち、ふるさと唐桑を愛する子どもの育成に取り組んでいます。

1、2年生は鮭の飼育と放流活動。自分たちが育てた稚魚が力強く沖に向かう姿を見ます。3年生は地元で養殖されているワカメについての調査。同じ養殖でも外洋と内湾では育つワカメの特徴が違うことに驚きをもちます。4年生以上はカキの養殖体験。カキの種はさみや耳つり、カキ碎き、温湯処理など実際に作業することによって養殖業に携わる人々の苦労や思いを知ります。その他、5、6年生は地元NPOが主催する「森は海の恋人植樹祭」に参加したり、海の環境について学んだりし

ます。これらは森里海のつながりに気付くきっかけとなり、また学んだことを発信することで学習をより深めるねらいもあります。

どの活動においても地域の方々の協力を得ています。漁船に乗り、実際に筏の上で行われる海の学習は何物にも代えがたいものです。海を通して多くのことを学ぶ活動を日々行っています。

読み書きの力が、生きる力に!

ACCUは、2017年9月8日に「国際識字デーイベント2017—読み書きの力が、生きる力に」を公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟と共に開催しました。本イベントでは、発展途上国と日本の識字の問題に焦点を当て、カンボジアの識字教室の元学習者と、日本で外国にルーツをもつ子どもとして日本語の読み書きを学んだ方にご自身のご経験をお話いただきました。参加者からは、「識字にかかわる問題は、途上国だけでなく、日本国内にもあることを学べた」「識字教育を通して人間の尊厳が確立されていくことを実感した。国内外で自分ができることを考えたい」といった声が寄せられました。



識字デーのイベントで講演するスヴォン・ソバルさん

403号p10 凸版印刷株式会社様訪問記でご紹介した印刷博物館の住所に誤りがありました。正しくは文京区水道1-3-3です。お詫びして訂正いたします。

アジア 東奔西走 第14回

インドというところ —学校を巡る編—

大田区立大森第三中学校 安藤俊明



後列右から4人目が筆者

笑顔のMITALI先生が指示を出すと、女子生徒たちは顕微鏡を操作しました。そして私にもレンズを覗くように促します。男子生徒たちは用意した黄色の水溶液にフェノールフタレインを垂らすと、試験管は一瞬で鮮やかな青色に変わり、その様子を自慢げに見せます。最後は大掛かりな橋の模型の紹介です。空気圧と電力を使い、条件によって橋が開閉する可動橋です。

ここはインド東部ビハール州にある公立中学校の理科室。この学校では、朝礼の前にヨガの時間があり、朝食の前に2時間の授業が行われる。制服を着て並ぶ生徒たちの雰囲気は日本のそれと少しも変わらない。

ムンバイからスタートした今回の旅は5日で2,500kmを移動していた。これまでの漠然とした観光旅行とは異なる

り、インドの学校がどんな所かを知るといった目的があった。待っていてくれる人がいるということが羅針盤となり、道中の迷いは少なく、短期間で3校を周れた。2016年に参加した「インド教職員招へいプログラム」の交流会で出会ったインドの先生たち何人に再会できるか? そんなきっかけで始めた旅だったが、インドに着いてから心温かな先生方とその生徒たちに出会えたおかげで、また少しお互いを知り合えた気がする。ダンニャワード!